

江戸落語家

三遊亭わん丈

「——お前さん、早く起きて

河岸へ行っておくれよ」

口を開いた瞬間、そこは長年連れ添った

夫婦が住む裏長屋に様変わりする。

江戸落語きつての人情話『芝浜』のはじまりだ。

滋賀県初の江戸落語家・三遊亭わん丈さんは、

年に数回、故郷に戻り、

地元の人びとの前で落語を披露している。

その胸には、生まれ故郷への熱き思いがあった。



profile
三遊亭わん丈さん
本名：延川照龍
(のべかわてるたつ)
膳所幼稚園→膳所小学校→北九州市立大学。地元の思い出の場所は、初デート(中3)で訪れた大津パルコ(現Oh!Me大津テラス)。家族との思い出の場所はびわ湖タワー。閉鎖時には解体のアルバイトで参加したほど



弟子入り志願をした3日後には円丈師匠宅を訪れ、たまたまのタイミングも重なって、わずか2カ月後に弟子入りを実現した

28歳で落語の世界へ

三遊亭円丈師匠と出会う

落語界では、師弟関係は絶対だ。入門後の弟子は、かばん持ちに始まり、師匠宅での雑用、寄席での下働きを担う。一方の師匠は、礼儀作法を教え、稽古をつける。その関係の濃厚さは、親子に近い。だからこそ落語に人生をかけると決心した人は、

慎重に、念入りに師匠探しに時間を充てる。

滋賀県初の江戸落語家・三遊亭わん丈さんにとって、円丈師匠との出会いは運命的だった。「高座に出てきた瞬間、『あ、この人だ』と思いました。破天荒でいて品がある。ナンセンスを突き詰めた噺の巧みさ。あつという間に虜になった。「どこか親父に似ているんですよ。優しい



1.わん丈さんが真打ちに昇進するのは、順調にいってもあと6〜7年後。幸いなことに、親子会はすでに実現した。いつか孫弟子を見せるため、わん丈さんは日々研鑽を続ける 2.2016年5月、親も同然の円丈師匠(右)と、前座の頃からまるで自分の弟子のように可愛がってくれている三遊亭円楽師匠(左)に見守られ、二ツ目に昇進した

夢を高座の上に定めた。

師を親のように慕い 努力を重ねて二ツ目へ

元々、人を引きつける能力に長けていた。小・中学生時代は校内でも有名で、クラス替えのたびに学級委員に推薦されていたほど。だが、持ち前の才能におごらず、気づきと努力によって自分が進む道を切り開いてきた。

2011年4月に円丈師匠の門下に入ると、1年後には前座に昇進。それまでの経験から「この業界は、最初にどれだけ力をつけるかで将来が決まる」と察し、わけあって人より長引いた5年強の修業時代を、腐らずに稽古に充てた。苦手な人名を覚えるために落語家一門名鑑を熟読し、それぞれのお茶の好みまで把握した。それでもどちらが先輩かわからない二人にお茶を出すときには、「上の師匠が先に取るはず」と考え、二人の真ん中に置いた。年の功と処世術、それにバンド活動で培った強心臓を駆使して、修業を乗り越えた。師匠は先生であり、親でもある。落語界では、親寄りの師匠が弟子に稽古をつける機会意外と多くない。しかし、円丈師匠は両方の側面を強く持っていた。他の師匠にも稽古をつけてもらいながらも、円丈師匠から滅多にない誉め言葉をもらったときが一番うれしかった。付き合っている女性にプロポーズしても良いかどうかの相談までした。「芸人の生活は驚かれるから、結婚の前に2年間同棲しなさい」といわれ、その

通りにした。

琵琶湖への誇りを胸に 新作落語で社会課題に挑戦

落語界では、出稽古の際に指導してもらった師匠には、お金ではなく物で謝意を示す。わん丈さんは「叶匠壽庵」(大津市大石龍門)や「たねや」(近江八幡市北之庄町)のお菓子を用意する。相手が酒好きと知ると、「松の司」(松瀬酒造/蒲生郡竜王町)を贈る。江戸落語家として東京を中心に活躍する一方で、故郷



6月30日にはびわ湖ホールで凱旋公演を開催。その雄姿を見ようと、地元から多くの身内や友人も訪れた。また、東京や北海道から駆け付けた熱烈なファンも

にかける思いは強い。



「わん丈」の由来は、円丈師匠による命名時に、円丈家の愛犬が横切ったことから。「日本参道犬研究会」の会長でもある円丈師匠から「わん」の字をいただいたのは光栄」とはわん丈さんの談

初凱旋公演は2015年6月。上方落語家・桂九雀師匠が旧大津公会堂で主催した「第28回わんざん寄席」で前座を務めた。翌年の二ツ目昇進後は、年4回ぐらいのペースで地元公演が実現している。「目標だったんですよ。季節ごとに誰かに交通費を出してもらって帰省するのが(笑)。軽快な語りと愛嬌ある笑顔は地元の人びとの心をつかみ、縁が縁を呼んで、昨年5月には三日月大造知事との対談にまでつながった。古典落語に『近江八景』という演目がある。「いしやま」「かたた」「からさき」などの地名が掛詞となる滑稽噺だが、長い、わかりづらい、受けにくいとあって、いかにせん演者がいない。滋賀県出身のわん丈さんは、これに新作落語の発想や工夫を取り入れ、原作の3分の1程度の長さのわかりやすい話に改編。十八番とした。現在は「海ごみ」に関わる活動を展開する。難しい社会問題がテーマだからこそ、落語でもしろおかしく表現すれば、あらゆる世代にわかりやすく伝わると考えた。「今の琵琶湖は、僕が滋賀に住んでいたころに比べると見違えて綺麗になった。水は人びとの努力によって綺麗になるんだと伝えたい」。故郷の湖を見てきたわん丈さんだからこそ、自信を持って課題解決に取り組んでいる。落語を通して、人々を笑顔に。さらにその先の、人々が住みやすい社会の実現まで見据える落語家・三遊亭わん丈さんの今後の活躍にも注目したい。